

# 19世紀アメリカンボードの宣教思想Ⅱ

## 1851-1880 (7)

塩野和夫

### 第3章 宣教師の思想と行動

#### 1 アグニューの思想と行動

##### はじめに

アメリカンボードの19世紀中期(1851-1880)における顕著な特質の一つに女性宣教師の活躍がある。財政的な困難を度々抱えた時期に、彼女たちの堅実な活動は宣教現場の信頼を得た。しかし、女性宣教師の活躍は19世紀中期に入って突然に出現したわけではない。前期にも多くの女性宣教師がいた。当時、海外宣教は女性が社会的に活躍できる数少ない現場の一つであったからである。

セイロンで「一千人の娘たちの母」<sup>1)</sup>と呼ばれたイライザ・アグニュー(Eliza Agnew, 1807-1883)<sup>2)</sup>も女性宣教師の先駆けとなった一人に違いない。セイロン

---

1) アグニューは「the Mother of a Thousand Daughters.」と呼ばれている。これを「一千人の娘たちの母」と訳した。ヘラルド誌はウッドウヴィレ学院(Oodooville Seminary)における40年に及ぶ活動によってアグニューが「800人を越える女性を育てた」と報告している。*Missionary Herald*, Sept., 1883, pp.329-330.

2) アグニューに関して次の文献がある。

‘Miss Eliza Agnew, Ceylon’s “Mother of a Thousand Daughters,”’ A. B. Child, *Modern Apostles of Missionary*, 1899. pp. 70-80.

‘Miss Eliza Agnew,’ I. J. Gracy, *Eminent Missionary Women*, pp. 179-185.

‘Eliza Agnew, or One Woman’s Work in the Foreign Field.’ Mary and Margaret W. Leitch, *Seven Years in Ceylon, Stories of Mission Life*. 1890. pp. 116-122.

<p style="text-align: center;"><b>Miss Eliza Agnew</b> Ceylon's "Mother of a Thousand Daughters" 1807-1883</p> <p style="text-align: center;">BY MISS ARBIE B. CHILD.</p> <p>I. <i>Early Life</i>.—1. <i>The Decision</i>.—In the early days of this century, about the year 1815, a faithful teacher in a day-school in New York City was giving a lesson in Geography to his pupils. As he pointed out the Isle of France on the map, he spoke of it as a place to be remembered as containing the grave of Harriet Newell who, years before, had been one of his favorite pupils. He gave an account of her beautiful life and early death, and portrayed to the class the condition of heathen people and her object in going to them. Among his scholars was a little girl of eight years with a serious, earnest face, named Eliza Agnew. Her sensitive nature was so stirred by the story of a great need, that, with a maturity beyond her years, she decided, then and there, that if it were God's will when she should grow to be a woman, she "would be a missionary to tell the heathen about Jesus." So was added one more consecrated life to the many which sprang from the influence of Harriet Newell, and thus did the seed thought of the present Student Volunteer Declaration find an early lodgment in her young heart.</p> <p>2. <i>Conversion and Service</i>.—As she grew to womanhood, duty to her parents and family friends kept her in New York City until her thirty-third year, but she never forgot the resolve of her childhood. At seventeen, in the midst of stirring revival scenes, she gave her heart to her Lord in whole-souled surrender, and a few weeks later united with the Presbyterian Church, under the pastoral care of the Rev. Dr. McCarter. Your after year went by filled with quiet home duties, and the only outside religious work open to women at that time—in the Sabbath-school and in tract distribution.</p> <p style="text-align: center;">70</p>	<p style="text-align: center;">MISS ELIZA AGNEW " "</p> <p>II. <i>Entrance into Missionary Life</i>.—In 1839 the death of her parents and the severance of other home ties had made it possible for her to fulfill her long-cherished purpose, and in April of that year, she made application for appointment as a missionary of the American Board.</p> <p>1. <i>Reasons for Going</i>.—Her letter of application contains these words: "It was not till my seventeenth year that I was brought to a knowledge of the truth as it is in Jesus, and the desire that sympathy had kindled in childhood was increased when I viewed them as immortal beings, possessed of spirits capable of enjoying God, ignorant of their true state and character, and the way of salvation through a crucified Saviour. These impressions, with a due sense of my obligations to Him who loved me and gave Himself for me, as well as the duties I owe to my dying fellow-creatures, and the blessing I have always enjoyed of uninterrupted health, constrain me to say, "Here am I, Lord, send me."</p> <p>2. <i>Testimonials</i> from her pastor and intimate friends, at that time, speak of her as possessed of "decision and firmness of character, of patience and perseverance;" as "modest, unassuming, obliging, kind, forbearing, cautious in speech, watchful to improve opportunities to speak for her Master;" of "an unswerving desire to spend and be spent in His service among the heathen."</p> <p>3. <i>Voyage and Arrival</i>.—Rejoicing "that the Lord had condescended to prosper my way," she set sail on the thirtieth of July, 1839, with the Rev. Phineas Hunt and his wife, and two others "Female teachers," Miss Sarah F. Brown, and Miss Jane B. Lathrop. (Miss Brown was soon obliged to return because of failing health, and Miss Lathrop afterwards married Rev. Henry Cherry of the Madura Mission.) They sailed on the bark <i>Black Warrior</i>, a vessel with rather a redoubtable name for such quiet people, on so peaceful a mission. To go half-way around the world in 1839 in luxurious steamers is a pleasant holiday excursion, but this little company in their cramped, uncomfortable quarters were five months at sea, arriving in Jaffa, Ceylon, in January, 1840. They went expecting never to return. They left their native land to remain till they should go to that land from whence they would go no more out forever.</p> <p>III. "Ceylon's Isle."—1. <i>The country to which Miss Agnew went is one where every prospect pleases. It was a delight for sea-dired eyes to rest on the gorgeous vegetation of the tropics; the flambo just ready to burst into a glory of scar-</i></p>
---	---

"Miss Eliza Agnew, "Mother of a Thousand Daughters,""

A. B. Child, *Modern Apostles of Missionary*, 1899

におけるアグニューの活動は1839年から79年にまで及ぶ。19世紀中期を中心に彼女の宣教活動の思想と行動を探りたい。

## 1 若い日の志

イライザ・アグニューは1807年2月2日にニューヨーク市に出生した。ただし、彼女の両親については名前も分からない。その理由は、イライザが宣教活動に関わる事がら以外については記録を残さなかったためだと思われる。彼女は「ニューヨーク市のいくつかの学校で学んだ」とわずかに記録がある。後に教育事業に携わった事実からすると、複数の学校で高等教育まで受けていたと推測できる。さらに、教育事業に関わっていた可能性もある。

比較的詳しく記録されているのは若い日の宗教的経験である。1815年のある

日、平日学校 (Day School) の地理の授業で教師は地図のある場所を示しながら、異邦人伝道に従事したハリエット・ニューエル (Harriet Newell, 1793-1812) の美しい生涯と早すぎる死を語った<sup>3)</sup>。聞き入っていた生徒の一人である8歳のイライザは「神の御心であるならば、将来異邦人にイエスを伝える女性伝道者になろう」<sup>4)</sup>と決意した。10歳の時には、宣教医ジョン・スカッター<sup>5)</sup>の講演を聞き感動している。大覚醒運動が盛り上がる1823年12月に回心を経験し、マックカーター牧師 (Rev. Dr. McCarter) の指導を受けてニューヨーク市にあるオレンジ通り長老派教会 (Orange Street Presbyterian Church) に所属した。

両親の死を契機として長年の志を実現するために、1839年4月にアメリカンボードの宣教師となる。女性宣教師として「黒い勇士」(Black Warrior) 号に乗船してボストンからセイロンへ旅立ったのはその年の7月30日である。

## 2 19世紀前期のセイロン・ミッション

イライザ・アグニューがセイロンへと旅立ったのは19世紀前期である。当時、セイロン・ミッションはどのような状況であったのか。ヘラルド誌は各ミッションの現況を毎年一覧表にして報告している。この一覧表を10年ごとに分析することにより、セイロン・ミッションの19世紀前期における状況を概観しておきたい。

ヘラルド誌がセイロン・ミッションの一覧表を初めて掲載したのは1821年1月号である。そこには、1816年に赴任した3組6名の牧師夫妻、1819年に赴任

---

3) ニューエル夫妻はインドからモーリシャス島に向かったが、島に上陸して間もなくハリエットは亡くなる。19歳であった。アメリカンボードが派遣した宣教者の最初の死である。

4) 'Miss Eliza Agnew, Ceylon's "Mother of a Thousand Daughters"', A. B. Child, *Modern Apostles of Missionary*, 1899. p. 70.

5) スカッターは1819年からセイロン・ミッションで宣教医として働き、1836年にインドのマドラス・ミッションに移っている。

した3組6名の牧師夫妻と1組2名の宣教医夫妻、1820年に赴任した独身の印刷工1名の氏名を記載している。

表1 セイロン・ミッション (1821年)<sup>6)</sup>

セイロン・ミッション (1816年成立)
ジェームズ・リチャーズ牧師, サラ・リチャーズ女史, ベンジャミン・C.メイグ牧師, メイグ女史, ダニエル・ブーア牧師, スーザン・ブーア女史 1816年 レビ・スパウルディング牧師, メリー・スパウルディング女史, ミロン・ウインスロー牧師, ハリエット・L.ウインスロー女史, ヘンリー・ウッドワード牧師, ウッドワード女史, ジョン・スカッター博士, マリア・スカッター女史 1819年 ジェームズ・ガレット (印刷工) 1820年

1830年1月号ヘラルド誌の記録によると、1821年以降のミッション活動に着実な成長が認められる。1821年までに着任していた15人は、3人<sup>7)</sup>を除いて、5つのステーションの責任を負っている。伝道活動以外ではティリパリー (Tillipally)・バティコッタ (Batticotta)・ウードウヰイレ (Oodooville) の3ステーションで教育活動に従事している。パンディテリポ (Panditeripo) ステーションでは医療活動を行っている。さらに、伝道活動・医療活動、そして教育活動においても現地人の協力者が現れている。

表2 セイロン・ミッション (1830年)<sup>8)</sup>

セイロン・ミッション 1816年設立, 5ステーション
ティリパリー・ステーション ヘンリー・ウッドワード牧師 (宣教師), ウッドワード女史 ティモティー・ドゥワイト (予備校の現地人教師と説教者), モーター (上級タムール語クラスの教師), ヴァルボティーン (タムール語の筆記者), ジョーダン・ロッジ (自由学校の管理者), サイルス・マンとデバサガヤム (自由学校の補助管理者, 試験官), セス・ペイリン (タムール語と英語の補助教師), ミカエル・B.ラティマー (補助教師), チャールズ・ホッジ, アゼル・バークス, サイルス・キンスプリー, バラマンティー (伝道者・トラクトの配布者)

6) *Missionary Herald*, January, 1821, p.1.

7) 1830年の報告で名前が見られなくなったのはジェームズ・リチャーズ牧師, サラ・リチャーズ夫人, 印刷工のジェームズ・ガレットの3名である。

8) *Missionary Herald*, January, 1830, p.7.

表2 つ づ き

<p>パティコッタ・ステーション          ベンジャミン・C.メイグ (宣教師), メイグ女史, ダニエル・プーア牧師 (宣教師, ミッション学校の校長), プーア女史          ガブリエル・ティセーラ (現地人説教者), サムエル・ウースター (補助教師), ジャスティン・エドワーズ (地理の教師), ジョン・コッドマン (算数の教師), ジョン・クリスワード, イスラエル・W.ブットナム, S.チャーチ, J.マチュース (様々な科目の教師), ジョージ・ダッシュユエル (自由学校の算数とタミール語文法の教師), I.エベネツァー・ポーター, アムパラバネン (自由学校の管理人)</p> <p>ウードゥヴィレ・ステーション          ミロン・ウインスロー牧師 (宣教師), ウインスロー女史          アサ・マファーランド (現地人伝道者), R.W.ヴァイレイ (算数と地理の教師), チャールズ・A.グッドリッピ, ジョン・B.フライツァー, ジョン・B.ローレンス (様々な科目の教師)</p> <p>パンディテリポ・ステーション          ジョン・スカッター M.D. (宣教師), スカッター女史          マルティン・テウラー (現地人医療助手), サムエル・ウィリス, T.W.コーシナタンベ (現地人助手)</p> <p>マネピー (Maneppy)・ステーション          レビ・スパウルディング牧師 (宣教師), スパウルディング女史          ウッドウッド (病気のため, 1828年4月よりテリリパリーを去り, 1年間療養の後に回復する。1829年4月より復職している。)</p>
--

1840年のセイロン・ミッション報告は活動者の資格だけを記載していて、活動内容が記されていない。そのために正確な活動内容は把握できない。しかし、1830年当時の活動を前提にすると、着実な展開を推測できる。1830年にあったステーションの3か所は活動を拡大し<sup>9)</sup>、2か所のステーションを加えている。全ての活動者を見れば、宣教師が1840年は6名 (1830年は6名)、医師が1名 (1名)、女性の補助宣教師が10名 (6名)、現地人説教者4名 (3名)、現地人助手48名 (22名)、合計70名 (49名)である。この数値はセイロン・ミッションにおいて伝道・教育・医療・印刷等各分野における着実な発展を推測させる。なお、発展の根拠として現地人助手が果たした役割が大きいとみられる。

9) 活動が減少、あるいは停滞していたステーションが2か所ある。テリリパリー・ステーションはウッドウッド宣教師の病気静養による影響、パンディテリポ・ステーションはスカッター宣教師の異動による活動休止である。

表3 セイロン・ミッション (1840年)<sup>10)</sup>

セイロン・ミッション	
テイリパリー・ステーション	
ベンジャミン・C.メイグ (宣教師), メイグ女史, 10名の現地人助手	
パティコッタ・ステーション	
ジェームズ・リード・イーカード, ヘンリー・R.ホイシングトン (宣教師), ナタン・ワード M.D. (医師), イーカード女史, ホイシングトン女史, ワード女史	
ヘンリー・マーティン, セト・ベyson (現地人説教者), 16名の現地人助手	
ウードゥヴィレ・ステーション	
レビ・スパウルディング (宣教師), スパウルディング女史	
ナタニエル・ナイルズ (現地人説教者), 7名の現地人助手	
パンディテリボ・ステーション (休会中)	
2名の現地人助手	
マネビー・ステーション	
イーストマン・ストロング・マイナー (印刷工)	
4名の現地人助手	
チャブガチェリー (Chavagachery) ステーション	
サムエル・ハッティングス (宣教師), ハッティングス女史	
チャールズ・A.グッドリッヒ (現地人説教者), 5名の現地人助手	
バネニー (Vaveny) ステーション	
ジョージ・H.アプトルプ (宣教師), アプトルプ女史	
4名の現地人助手	
6か所のアウト・ステーション	
航海中 イライザ・アグニュー女史, サラ・F.ブラウン女史, ジェイン・E.ラトロップ	
7か所のステーション, 6か所のアウト・ステーション, 宣教師6名, 医師1名, 印刷工1名, 10名の女性補助宣教師, 4名の現地人説教者, 48名の現地人助手	合計 70名

1850年セイロン・ミッションの統計を1840年のそれと比較すると明らかな後退が見られる。アメリカ人の活動家は宣教師12名 (1840年は6名), 医師1名 (1名), 印刷工2名 (1名), 女性補助宣教師14名 (10名), 合計29名 (18名)と増加している。ところが, 現地人説教者2名 (4名), 現地人助手27名 (48名), 合計29名 (52名)とほぼ半減している。活動現場の厳しい現実が推測できる。それまで順調に推移してきたセイロン・ミッションの1840年代に何が起こっていたのか<sup>11)</sup>。ストロングは1837年にアメリカで発生した不景気がセ

10) *Missionary Herald*, January, 1840, p.10.

イロン・ミッションに「171の自由学校が閉鎖され、5000人以上の生徒が突然に退校させられた」と記している<sup>12)</sup>。1840年代に入ると、ボード本部の教育事業削減に対する方針によりセイロン・ミッションの教育活動は苦境に立たされる。イライザ・アグニューがセイロンにおいて教育活動に責任を負ったのはそのような時期であった。

表4 セイロン・ミッション (1850年)<sup>13)</sup>

セイロン・ミッション
テイリパリー・ステーション ベンジャミン・C.メイグ, アディン・H.フレッチャー (宣教師), エリザベツ・S.フレッチャー女史, 5名の現地人助手
パティコッタ・ステーション ヘンリー・R.ホイシントン, ウィリアム・ホーランド, ユウロタス・P.ハスティンクス, サイルス・T.ミルズ (宣教師), ナンシー・L.ホイシントン女史, スーザン・R.ホーランド女史, 1名の現地人説教者, 3名の現地人助手
ウードゥヴィレ・ステーション レビ・スパウルディング (宣教師), メアリー・C.スパウルディング女史, イライザ・アグニュー女史 (教師), 1名の現地人説教者, 2名の現地人助手
マネピー・ステーション サムエル・F.グリーン M.D. (医師), イーストマン・ストロング・マイナー, トーマス・S.バーネル (印刷工), ルーシー・B.マイナー女史, マーサ・バーネル女史, 6名の現地人助手
パンディテリボ・ステーション ジョン・C.スミス, ジョセフ・T.ノイズ (宣教師) ユーメイス・T.スミス女史, エリザベツ・A.ノイズ女史, 3名の現地人助手
チャブガチェリー・ステーション ウィリアム・W.スカッター (宣教師) 3名の現地人助手
バネニー・ステーション 1名の現地人助手
ウードゥピティ (Oudoopitty) ステーション 3名の現地人助手

- 11) セイロン・ミッションを記した次の文献がある。  
 Rev. W. W. Howland, *Historical Sketch of the Ceylon Mission*, 1865.  
 セイロン・ミッションは以下のアメリカンボード史にも記載されている。  
 S. C. Bartlett, *Sketches of the Missions of the American Board*, 1872.  
 W. E. Strong, *The Story of the American Board*, 1910.  
 F. F. Goodsell, *You shall be my Witness*, 1959.
- 12) W. E. Strong, *Ibid.*, pp.32-33.  
 13) *Missionary Herald*, January, 1850, p.10.

表4 つ づ き

アウト・ステーション

カラダイブ (Caradive), バラニイ (Valany), プーンゲダイブ (Poongedive), カイツ (Kaits), ムーライ (Moolai) はバティコッタ・ステーションと関係を持っている。アトコーヴァニイ (Atchoovany) はウードウピティ・ステーションと関係を持っている。

この国にダニエル・プーア, エドワード・コープ (宣教師), アン・K.プーア女史, エミリー・K.コープ女史, サラ・M.メイグ女史, アンチ・C.ホワイテルシー女史が滞在する。

8ステーション, 6アウト・ステーション, 12名の宣教師, 1名の医師, 2名の男子・14名の女性補助宣教師, 2名の現地人説教者, 27名の現地人助手 合計58名

### 3 ウードウヴィレ女学校とイライザ・アグニュー

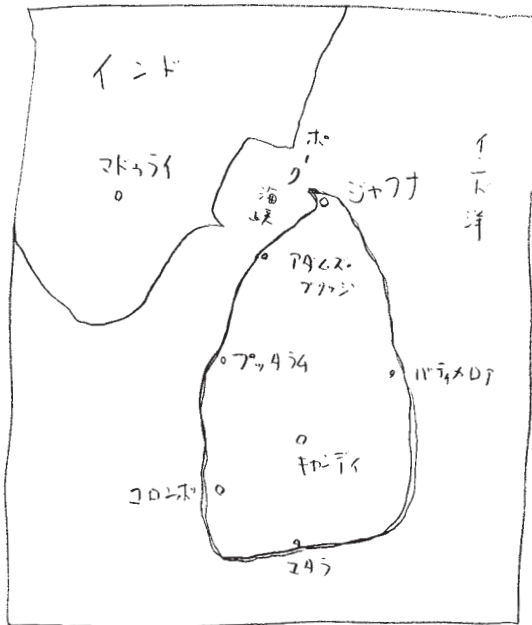
1850年当時, すなわち19世紀前期から中期に移行する時点におけるセイロン・ミッションはどのような状況にあったのか。1816年に開始されたアメリカンボードによる宣教活動はジャフナ近郊から始められた。5つのステーションがその地域に建設される<sup>14)</sup>。それは, テイリパリー (Tillipally), バティコッタ (Batticotta), ウードウヴィレ (Oodooville), パンディテリポ (Panditeripo), マネピー (Maneppey) の各ステーションである。なお, 7つのアウト・ステーションはすべてジャフナ近郊にあったステーションと関係しているため, それらもジャフナ近郊にあったと推測できる。したがって, ボードによるセイロン島における活動は北部を中心としたと考えられる。

19世紀前期のセイロン・ミッションで最も地域社会から受け入れられたのは初等教育である。ステーションが各地に設けた自由学校には多くの生徒で溢れ, 現地人教師を積極的に雇って初等教育を実施した。その上に設立されたセミナーは少人数教育で中等教育を実施した。女子のために設けられたセミナー

---

14) テイリパリー・ステーションはジャフナから9マイル北に1816年に設立された。バティコッタ・ステーションはジャフナから6マイル北西に1817年に設立された。ウードウヴィレ・ステーションはジャフナから5マイル北に1820年に設立された。パンディテリポ・ステーションはジャフナから9マイル北西に1820年に設立された。マネピー・ステーションはジャフナから4.5マイル北西に1821年に設立された。  
*Missionary Herald*, Jan., 1827. p.7.





スリランカ (かつてのセイロン)

は寄宿制度を採用していた。バティコッタ・ステーションに設けられた男子セ  
 ミナリーも同様であった。1824年に開設され<sup>15)</sup>1828年に閉鎖した女子セミナ  
 リーはマネピー・ステーションに設けられていた。1828年に再開されたのは  
 ウードゥヴィレ・ステーションで、女子セナリーへの責任を負ったスパラル  
 ディング女史はステーションへの責任もあり多忙を極めた。加えて、女子教育  
 への理解を欠いていた地域社会は生徒を送り出さなかった。表5において1830  
 年代の男子セナリーに対して女子セナリーの在校生が少ないのはそのよう  
 な事情による。イライザ・アグニューが女子セナリーの専任教員として赴任  
 したのは在校生がようやく増え始めた1839年である<sup>16)</sup>。1840年代に入り、アグ

15) M. H. Harrison, *Udvil : High lights of the First Hundred Years, 1824-1924*, p. 3.

16) ただし、1841年のヘラルド誌1月号はイライザ・アグニューについて「所属未  
 定」としている。*Missionary Herald*, Jan., 1841. p.9.

ニューの働きを得た女子セナリーは着実な歩みを続けている。1843年1月号のヘラルド誌によると、1842年当時、責任を負うスパラルディング女史と専任教員のイライザ・アグニューに加えて、数名の現地人助手の助けを得て学校は運営されている。アグニューが女子セナリーの責任を負い始めたのは1844年である<sup>17)</sup>。ところが、その頃から在校生数が減少していく。背後にあったのは経済的事情である。「セナリーに要する費用は減少していかざるをえない。そのためセナリーは徐々に閉鎖されていくことになるだろう」<sup>18)</sup>。きびしい経済的状況に置かれたセナリーに思いもかけない援助が与えられる。それはセイロン政府による支援であった<sup>19)</sup>。



女子セナリーの授業風景

17) *Missionary Herald*, Jan., 1845. pp.8-9.

18) *Missionary Herald*, Jan., 1850. p.10.

19) W. E. Strong, *Ibid.*, p.32.

表5 男女セミナーの在校生<sup>20)</sup>の推移 (1826-50)

	1826	1827	1828	1829	1830	1831	1832	1833	1834
男子セミナー	126	-	-	77	-	91	83	-	-
女子セミナー	31	28	close	35	-	37	26	-	-
	1835	1836	1837	1838	1839	1840	1841	1842	1843
男子セミナー	124	148	166	151	148	149	-	200	184
女子セミナー	51	-	75	90	95	95	-	118	-
	1844	1845	1846	1847	1848	1849	1850		
男子セミナー	116	124	104	(合計で)	120	-	108		
女子セミナー	120	114	101	218	90	100	81		

19世紀中期の1850年代に入ると、男子セミナーと女子セミナーの歩みに大きな差異が認められる。これは何なのか。R.アンダーソンとA.C.トンプソン博士がアメリカンボード本部からの代表団としてインド・セイロンを巡回したのは1854-55年である。彼らは各地でボードの新方針「自給・自治・宣教主体」の教会形成を訴えて回った<sup>21)</sup>。それによって大きな打撃を受けたのはミッションが経営していた中等・高等教育機関である。男子セミナーはボード本部の方針に従い、1856年頃にセミナーを閉鎖したうえで1861年に神学教育に特化した職業訓練校として再出発している。それに対して女子セミナーは従来通り中等教育機関であり続けた。そこには学校の責任を負ったアグニューの強い意志とそれに基づく行動力があつたに違いない。それでもストロングは「ウードゥヴィレの女子寄宿学校は相応に制限を受けた<sup>22)</sup>」と指摘している。

アグニューの強力なリーダーシップが1850年代から70年代の女子セミナーを支えた。ところが、彼女は1880年にセイロンに向かっていたレイチェ女史に宛てた手紙で意外な自らの内面を明らかにしている。

20) たとえば、1826年の在校生数として記入しているのはヘラルド誌の1827年1月号の記録である。そのようにヘラルド誌の1月号に記載された在校生数を前年の数値として記入している。

21) W. E. Strong, *Ibid.*, pp. 116-17.

22) W. E. Strong, *Ibid.*, p.171.

私のように40年に及ぶ年月を一つのステーションに留まった人はありません。仕事に関しては、霊的にははともかくとして、肉体的には私は弱く、弱く、いつも弱く、イエスが「わたしのもとに来て、休んでいきなさい」と言われているように安らぐ場が必要でした<sup>23)</sup>。

アグニューが告白する彼女の内面の弱さと女子セナリーの経営に対する力強いリーダーシップをどう考えればよいのだろうか。ユング心理学にヒントがあるように思われる。河合隼雄によると、「内向と外向、思考と感情、ペルソナとアニマ（アニムス）等は互いに他と対極をなし相補的な性格を持っている<sup>24)</sup>」。つまり、アグニューにおいてはリーダーとしての強さと個人的な内面の弱さがバランスを取って、全体性を保っていたことになる。

表6 男女セナリーの在校生の推移（1851-79）

	1851	1852	1853	1854	1855	1856	1857	1858	1859
男子セナリー	108	99	-	93	-	-	閉鎖中 <sup>25)</sup>	-	-
女子セナリー	93 <sup>26)</sup>	95	-	85	-	-	65	62	43
	1860	1861	1862	1863	1864	1865	1866	1867	1868
男子セナリー		20 <sup>27)</sup>	22	21	22	21	31	-	40
女子セナリー	39	47	46	44	44	50	50	-	46
	1869	1870	1871	1872	1873	1874	1875	1876	1877
男子セナリー	-	18	-	25	29 <sup>28)</sup>	42	30	35	31
女子セナリー	-	53	-	53	54	60	-	96	88
	1878	1879							
男子セナリー	56	67							
女子セナリー	86	93							

23) A. B. Child, *Ibid.*, p.79.

24) 河合隼雄『ユング心理学入門』219頁

25) 1858年1月号のヘラルド誌に男子セナリーが閉鎖中であり、再び開校しようとする動きがあることを報じている。*Missionary Herald*, Jan., 1858. p.7.

26) 93名の在校生中、23名の教会員がいたことをヘラルド誌は報じている。*Missionary Herald*, Jan., 1852, p.9.

## おわりに

アグニューには内面的な弱さと相補的な関わりを持つもう一つの重要な要素があったと考えられる。それは女子セミナリーの生徒に対する態度である。

40年の間、一千名を越える生徒が彼女のもとに来た。生徒たちは等しくアグニューを母として愛した。最初の生徒の孫も教えた。そこで人々は彼女を「一千人の娘たちの母」と呼んだ<sup>29)</sup>。

内面的な弱さと相補関係を持つもう一つの側面は、40年間変わることもなかった生徒に向けた態度である。それは生徒からは母としての振る舞いと受け止められた。そこにあったのはアグニューの優しさであり、変わることのない受容力に違いない。

アグニューは一人ひとりの生徒を母の優しさで受け止め続けた。だから、「一千人の娘たちの母」という呼称は彼女にふさわしいのである。



3世代（祖母・母・娘）にわたるアグニューの生徒たち

27) 神学教育に専門化した職業訓練校として再び開校されたことを報じている。 *Missionary Herald*, Jan., 1862, pp.13-14.

28) 男子セミナリーはこの年にティリパリー・ステーションへ移転している。

29) A. B. Child, *Ibid.*, p.76.